

平成30年6月8日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370442

研究課題名(和文) 韓国語慶尚道方言のアクセント研究

研究課題名(英文) A Study of the Accent of Kyongsang Korean

研究代表者

伊藤 智ゆき (Ito, Chiyuki)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号：20361735

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では韓国語慶尚北道大邱方言、慶尚南道釜山方言のアクセントについて、特に名詞・動詞・形容詞を対象に分析を進めた。主要な研究成果は以下の通り。慶尚道方言のアクセントパターンと語幹の分節音との間には統計学的に有意な相関性がある。慶尚北道・南道方言のアクセントはともに中期朝鮮語アクセントと規則的に対応し、不規則的対応は様々な音韻論的特徴により説明される。慶尚北道・南道方言のアクセント分布は互いに類似するが、中期朝鮮語からの異なるアクセント変化を反映した違いも見られる。釜山方言の舌頂音阻害音末子音を持つ一音節語名詞は、アクセントと基底末子音が連動してデフォルト型へ類推的に変化する傾向がある。

研究成果の概要(英文)：In this study, I investigated the accent patterns of both North and South Kyongsang dialects of Korean, in particular focusing on native nouns, Sino-Korean nouns and verbs/adjectives. Major findings are as follows. There are statistically significant correlations between accentual patterns and segmental shapes of the stems. Both dialects show regular correspondences with the attested Middle Korean accent, and irregular correspondences are explained by various phonological factors. North and South Kyongsang Korean tend to show similar accentual distributions, but some differences due to different historical developments from Middle Korean are also observed. In the Pusan dialect, monosyllabic nouns with a coronal coda tend to change the conservative accent to the innovative accent when they change the phonetic realization of the underlying traditional coda, both of which are explained as analogical changes to the default.

研究分野：音韻論、歴史言語学

キーワード：韓国朝鮮語 アクセント 歴史言語学 中期朝鮮語 類推変化

1. 研究開始当初の背景

筆者が研究開始当初までに行ってきた研究は、主として朝鮮語の共時・通時音韻論に関するものである。共時音韻論的研究としては、借用語研究(日本語/英語/中国語 朝鮮語借用語)、現代朝鮮語方言研究、標準朝鮮語の音素配列に関する統計学的研究などがある。通時音韻論的研究としては、朝鮮語舌頂音末子音の歴史変化に関する研究、朝鮮語固有語・漢字語アクセントの歴史変化に関する研究、朝鮮漢字音研究、15-16世紀中期朝鮮語アクセント・イントネーション研究、約6,800語の見出し語からなる中期朝鮮語アクセント辞典作成(2009-2011年基盤研究(B)「朝鮮語史の国際的共同研究のための研究資源基盤構築」(東京外国語大学・伊藤英人) 2004-2005年度若手研究(B)「中期朝鮮語アクセント辞典作成」による)などがある。

一方、2009-2011年度若手研究(B)「延辺朝鮮語の音声学的・音韻論的研究」、2012-2013年度若手研究(B)「延辺朝鮮語の用言に関する音韻論的研究」により、とりわけ中国吉林省延辺朝鮮族自治州で話される延辺朝鮮語について、音声学的・音韻論的研究を進めてきた。同科研究費による研究では、名詞(固有語・漢字語・借用語)と動詞・形容詞に関する調査・記述研究を行い、60名以上の話者を対象に発話の録音を行った上、最大で21名の話者を対象に語彙収集・アクセント調査を実施した。また収集データに基づき、延辺朝鮮語の基礎的な音声学的特質(例:語頭閉鎖音のVOT,後続母音のF0・voice quality,語中における各閉鎖音の閉鎖時間・VOT,基本母音のF1/F2/F3)とその世代差・性差・個人差について統計学的に分析する一方、様々な音韻論的研究を行ってきた(借用語研究、アクセント変化の研究、各語彙クラス(固有語・漢字語・借用語)におけるアクセントクラスの分布と音節量・音節構造との相関性に関する研究、用言アクセントクラスの分類と歴史的発展に関する研究等)。

2. 研究の目的

本研究では、それまで行ってきた延辺朝鮮語及び中期朝鮮語の調査・研究を踏まえ、同じく朝鮮語方言の一つである韓国語慶尚道方言を対象に研究を進めることにより、朝鮮語アクセントの音声学的・音韻論的研究を更に発展させることを目標とした。具体的には、慶尚道方言の調査を通し、(1)アクセントに関して共時・通時音韻論的に分析すること、(2)アクセントの音声学的実現について音響音声学的に分析すること、(3)パリエーションの原因・方向性について検討すること、(4)慶尚北道・南道方言の比較を行うこと、を主

要な目的として、研究を開始した。

3. 研究の方法

- (1) 慶尚道方言アクセント調査の実施: 慶尚北道方言、慶尚南道方言のそれぞれについて、固有語、漢字語(一・二音節語)、借用語、動詞・形容詞のアクセント調査を実施する。
- (2) 慶尚道方言アクセントに関する音響音声学的分析: 特に重要と考えられる点について、話者複数名を対象に録音を行い、音響音声学的分析を行う。
- (3) 慶尚道方言名詞アクセントの研究: 慶尚道方言の名詞アクセントについて、共時的・通時的に分析する。なお、慶尚北道方言と慶尚南道方言との代表的な違いとして、中期朝鮮語の上声クラス(第一音節が上昇調で現れるクラス)が、前者では長母音を伴うH:H調に、後者ではLH調に対応する点が挙げられる。特にこの差異に注目しながら、両方言のデータを同一基準で比較分析する。
- (4) 慶尚道方言動詞・形容詞アクセント研究: 中期朝鮮語の動詞・形容詞語幹は、活用アクセントパターンに基づき複数のアクセントクラスに分類され、またそのアクセント分類は、語幹の音節構造と強い相関性があることが知られている(Ramsey 1978)。慶尚道方言にもそれに対応するクラス分類が見られるか、確認を行う。

4. 研究成果

主要な研究成果は以下の通りである。

- (1) 慶尚北道方言固有語単純語名詞のアクセント研究: 慶尚北道方言のうち、大邱方言を対象に、固有語単純語について調査・研究を進めた。5人の話者から得られたデータを元に、各アクセント型の比率、話者間のアクセント型の一致率、分節音や音節量、使用頻度との相関性、中期朝鮮語アクセントとの規則的対応率等について明らかにするとともに、どのような原因で例外的パターンを見せる語彙が現われるかについても考察を進めた。更に、無意味語に付与されるアクセント型についても、調査・分析を行った。得られた結果について慶尚南道釜山方言との比較を行い、両者は固有語の各アクセント型の分布においては基本的に似た傾向を示すものの、アクセント体系の違いに基づき、無意味語テストにおいて顕著な差異が見られることを明らかにした。
- (2) 慶尚南道方言固有語単純語名詞のアクセント研究: 慶尚南道釜山方言については、

特に舌頂音阻害音を末子音に持つ一音節語について、40名の釜山方言話者を対象に調査を行い、アクセント変化と分節音の変化が連動する傾向があることを明らかにした。これは、韓国語名詞の舌頂音末子音において/-s/が最も高い異なり頻度で現われ、また慶尚南道方言の固有語一音節名詞において、H(H)型がH(L)型よりも多く現われる、という二つの分布上の偏りを反映したものと解釈される。更に、各アクセントクラスが単独形・曲用形において実際にどのような音調型で現われるかについて、6名の話者の録音に基づき、音響音声学的分析を行った。

- (3) 一・二音節漢字語アクセント研究：慶尚北道方言母語話者(大邱)を対象に、一・二音節漢字語のアクセントについて調査を行い、中期朝鮮語アクセントとの対応及び分節音との相関性について明らかにした。それにより、少なくとも一部の話者においては、中期朝鮮語上声に対応する長母音が、閉音節及び、激音・濃音頭子音に先行する音節において短母音化する傾向があることを見いだした。また、慶尚北道方言・慶尚南道方言の漢字語3音節語について簡易的な調査を行い、両者のアクセント分布は類似する傾向があるものの、アクセント体系及び合流するアクセント型の違いを反映して、異なるアクセント上の類推変化を見せていることを確認した。
- (4) 慶尚南道方言における動詞・形容詞アクセント調査：慶尚南道方言の一・二音節動詞・形容詞語幹について、5活用形のアクセントパターンについて調査を行い、中期朝鮮語アクセントとの対応関係、分節音との相関性について分析を進めた。それにより、慶尚南道方言の動詞・形容詞には、中期朝鮮語同様のクラス分類が見られることを確認した。
- (5) 慶尚北道方言の借用語アクセント研究：慶尚南道方言に比べ、報告の少ない慶尚北道方言の借用語アクセントについて調査を行い、借用語には固有語に見られない様々なアクセント型が見られること、長母音の分布にかなりの個人差・世代差が見られること、音節量とアクセント型との相関性が慶尚南道方言ほど強くないこと、日本語借用語については、原語のアクセント及び長短の区別が反映されている可能性があることなどを見いだした。
- (6) 慶尚北道方言若年話者における長母音消失に関する音響音声学的研究：慶尚北道方言の若年話者においては、長母音/短母音の対立が次第に失われつつあると言われているが、両者の対立を依然として保持している話者を対象に、長短の対立が、異なる音韻論的環境によりどのように実現されるのか、発話を録音し、音響音声学的分析を進めた。

- (7) 語彙クラスによる音素配列パターンの違いに関する研究：本研究及び筆者のこれまでの研究により、韓国朝鮮語諸方言(慶尚道方言、延辺朝鮮語等)において、語彙種(固有語、漢字語、借用語)の違いがピッチアクセントパターンの分布に影響することが分かっているが、そのことを踏まえ、語の音韻論的特徴(頭子音、母音、末子音、及びそれらの連続)のみで、語彙種の分類が可能であるか、「韓国語慶尚道方言のアクセント研究(国際共同研究加速基金(国際共同研究強化)H28~H30)伊藤智ゆき」と連携しつつ、検討を進めた。Maxent Grammarモデル(Hayes and Wilson 2008)を用い、同一パラメータ設定で、複数回、固有語・漢字語・借用語データの学習を行わせ、全ての学習に共通して現れた制約群・最低二回の学習に共通して現れた制約群・各学習に見られた制約群の合成等、様々なパターンについて、モデル精度の比較を行った。また、データ全体において漢字語の比率が高いことから、全ての語がデフォルトの漢字語であると想定するベースモデル、各語彙種の比率に基づきランダムに語彙種を想定する異なり頻度モデル、ngramを用いたモデル等との比較も行った。これらにより、韓国朝鮮語の語彙種は、音韻論的特徴(素性を用いた制約群)により、最も正確に分類されることを見出した(ただし、一定の条件がある)。

<引用文献>

- Hayes, Bruce and Colin Wilson. (2008). "A maximum entropy model of phonotactics and phonotactic learning". *Linguistic Inquiry* 39-3: 379-440.
- Ramsey, Robert S. (1978). *Accent and Morphology in the Korean Dialects*. Seoul: Tower Press.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

Ito, Chiyuki. (2017). "A sociophonetic study of the ternary laryngeal contrast in Yanbian Korean". *音声研究* 21-2: 80-105. 査読有.

Ito, Chiyuki and Michael Kenstowicz. (2017). "Pitch accent in Korean". *Oxford Research Encyclopedia of Linguistics*. 査読有.
<http://linguistics.oxfordre.com/abst>

ract/10.1093/acrefore/9780199384655.
001.0001/acrefore-9780199384655-e-24
2?rskey=INuW2u&result=1

Son, Jae-Hyun and Chiyuki Ito. (2016).
“The accent of Korean native nouns:
North Gyeongsang compared to South
Gyeongsang”. *Studies in Phonetics,
Phonology and Morphology* 22.3: 499-532.
査読有. DOI:
10.17959/sppm.2016.22.3.499

Ito, Chiyuki. (2016). “Analogical
change of accent in the verbal
inflection of Yanbian Korean”. *Lingua*
183: 34-52. 査読有. DOI:
10.1016/j.lingua.2016.05.005

Ito, Chiyuki and Michael Kenstowicz.
(2014). “The adaptation of
contemporary Japanese loanwords in
Korean.” *Japanese/Korean Linguistics*
22: 3-20. 査読無.

Ito, Chiyuki. (2014). “Compound
tensification and laryngeal
co-occurrence restrictions in Yanbian
Korean”. *Phonology* 31: 349-398. 査読
有. DOI: 10.1017/S0952675714000190

Do, Young Ah, Chiyuki Ito and Michael
Kenstowicz. (2014). “The base of
Korean noun paradigms: Evidence from
tone”. *Korean Linguistics* 16-2:
111-143. 査読有. DOI:
10.1017/S0952675714000190

Do, Young Ah, Chiyuki Ito and Michael
Kenstowicz. (2014). “Accent classes
in South Kyongsang Korean: Lexical
drift, novel words, and loanwords”.
Lingua 148: 147-182. 査読有. DOI:
10.1016/j.lingua.2014.05.006

[学会発表](計4件)

Ito, Chiyuki. (2017). “A
sociophonetic study of the ternary
laryngeal contrast in Yanbian
Korean”. 2017年10月2日. MIT
Phonology Circle. MIT.

Ito, Chiyuki. “Dependent vs.
independent accentual changes: a case
study of Yanbian Korean nouns”. The
10th International Workshop on
Theoretical East Asian Linguistics.

2015年6月13日. 東京外国語大学.

伊藤智ゆき. 「韓国語名詞パラダイムに
おける類推と語彙再構築」. 日本言語学
会(招待講演). 2014年11月16日. 愛
媛大学.

Ito, Chiyuki. “Accent and
phonological system of Proto-Korean”.
「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比
較歴史的研究」研究発表会. 2014年6
月27日. 国立国語研究所.

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ等

<http://www.chiyukit.sakura.ne.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 智ゆき (ITO, Chiyuki)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文
化研究所・准教授
研究者番号: 20361735

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

Albright, Adam
Department of Linguistics and
Philosophy, MIT, Professor

Do, Young Ah
Department of Linguistics, The
University of Hong Kong, Assistant
Professor

Kenstowicz, Michael
Department of Linguistics and
Philosophy, MIT, Professor

孫在賢 (Son, Jae-Hyun)
徳成女子大学・日語日文学科・助教授